

郷愁と確執と、クリオール女性の描く「故郷」 — ジーン・リースとフィリス・オーフリーのドミニカ島 —

堀内 真由美

教育ガバナンスコース

Nostalgia and Conflict Over a Home Island for Creole Women — The Island of Dominica Represented by Jean Rhys and Phyllis Allfrey —

Mayumi HORIUCHI

Department of Educational Administration and Governance, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

1. 課題のありか：「故郷を描く」ということ

本稿の目的は、旧英領西インド植民地の、クリオールと呼ばれた現地生まれの白人が描く故郷への心情を、脱植民地へといたる時代を背景に考察し、その意味を明らかにすることにある。考察対象とするのは、西インド諸島ドミニカ島（現・英連邦ドミニカ）出身の女性作家、ジーン・リース（Jean Rhys, 1890-1979）とフィリス・オーフリー（Phyllis Allfrey, 1908-1986）の作品である。

この二人を取り上げたのは、故郷をただ懐かしむだけでは済まされない複雑な立場を共有しているからだ。リースは曾祖父が奴隷主であり、オーフリーも島の支配層の一族出身である。二人とも10代後半で離島したあと、欧州や北米に渡り本国イギリスで長く暮らす。

二人が人生の節目で故郷をどのように描いたか、その一部分を、筆者はすでに『研究報告』63輯および65輯で論じている¹⁾。今回は、二人の故郷の描き方を比較しながら論を進める。その際、彼女たちの本国での体験における相違に注意を払い、人生の終焉と、政治生命の終焉に際して、リースとオーフリーがそれぞれ描いた故郷と故郷への心情を考察する。考察に入る前に、「支配した側が故郷（植民地）を描くこと」がどのように議論されているか、最近の研究動向を概観しておきたい。

ポストコロニアル文学と引揚者

かつての植民地地域から誕生した「ポストコロニアル文学」と呼ばれる作品の多くには、支配者に蹂躪された故郷や、政治的独立後も社会的・文化的に混乱する故郷が描かれる。他方、(旧)宗主国側の作家の作品

にも、植民地主義の記憶をとどめるものとして評価されるものが少なくない。植民地をはさんで立つ、この二つの文学世界に、かつての植民地で支配者側に属した者が描き残した「故郷の物語」を、比較研究の対象に加えようとする新しい研究動向がある。

例えば、立命館大学国際言語文化研究所は、2013年の研究紀要の特集の一つに「比較植民地文学研究」を掲げ、「引揚者」の文学をテーマに据えた。テーマ設定の理由として研究代表の西成彦は、「ポストコロニアル文学」の名では呼びづらい「引揚者」の文学を、現代文学の「古典」たらしめることができるか試みるためと説明している²⁾。

「引揚者」の文学が、「ポストコロニアル文学」とは呼びづらい状況にある背景について、2000年3月まで同研究所長であった西川長夫が、遺作『植民地主義の時代を生きて』のなかですでに論じている。「植民地主義と引き揚げ者の問題」という一節で西川は、「大学に籍を置く者としてはおそらく最後になる仕事」として植民地主義という問題への取り組みを選んだ理由を記す。それは、「近代の最も重要な問題の一つでありながらも、かつてそれ本来の深さと広がりにおいてまったくような考察と研究の対象となったことはない、と常々考えており、近年その思いがいつそう高まってきた」からである³⁾。

西川は、生後から11歳まで朝鮮、満州という植民地で過ごした時間を、16世紀の大航海時代に始まる、世界の8割以上が植民地化された植民地主義の長い歴史の中に位置づけようとする。植民地及び植民地主義とは、「全人類的な歴史にかかわる問題」にもかかわらず、そのことが学ばれていない。西川は、「植民地と植民地主義を隠蔽し、私たちに見えなくさせる大きな力が働いているように思われる」と指摘したうえで、660

万人という人口の1割に近い旧植民地からの引揚者が
ありながら、日本では、植民地という言葉と植民地問
題が忘れられていったことを問題視する。

加害者が犠牲者になるという引揚者の物語は、「一
種倒錯した世界」で、「そこに歴史の真実があることも
また否定できないだろう」としつつ、西川は「植民地
と植民地主義の隠蔽」に、引き揚げ物語が利用される
懸念も表明する。引き揚げ物語が「犠牲者ナショナ
リズムと、それと裏腹にある、ある種のヒロイズムをま
ぬかれることはむずかしい」からであり、藤原ていの
『流れる星は生きている』以降の作品についても、「そ
の点で読むに堪えないものが多い」と批判する⁴⁾。

「入植者」と同様、「引揚者」も「複雑多様な集団」
だった。西川はその多様さを考慮する一方、かれらは
植民地喪失前後の混乱のなかでも、「帝国主義の尖兵
的存在だった」と断じる。西川が批判する「引揚者の
物語」を、西成彦の言う現代文学の「古典」たらしめ
るには、そこに「植民地と植民地主義の隠蔽」に抗し
続ける姿勢が反映されていることが不可欠となろう。

「引揚げ文学」とクリオール

日本の外から「引揚者」の文学にアプローチする研
究もある。西とも研究交流のある韓国の日本文学研究
家、朴裕河は、近著『引揚げ文学論序説』の中で、日
本の「帝国時代の記憶にこだわり続けた人々」の存在
を「引揚げ作家」のなかに見出し、その作品を「引揚
げ文学」と命名する。

作家たちの多くは「引揚げ後も自らを「在日日本人」
と認識し、自らの異邦人性を強く自覚していた」。なか
でもその意識を最も強く持っていたのは「青少年期ま
での時期をかの地で過ごした結果として、植民地や占
領地以外には「故郷」がないと感じていたひとたちで
ある」とし、朴は「植民者の子ども」に注目する⁵⁾。

「植民地の小さな植民者」たちが、被植民者による
植民者の蹂躪（＝関係の転倒）をも逃がさずに描いて
いる」と指摘し、その例を、朴が英領植民地からの
「引揚げ文学」だと位置づける、ジーン・リースの代表
作『広い藻の海』（*Wide Sargasso Sea*, 1966）から解説
する。作中の「黒人の男がクリオールの母を椅子から
抱きあげてキスするのが見えた」場面を挙げ、主人公
のクリオール少女が目撃場面から逃げ出したことを、
朴は「そのキスが愛のキスではなく制裁のキスでしか
ないことを感づいてのこと」だと解釈し、そのような
「転倒した構図」に気づき書とめえたのは、「作家がす
でに「元植民者」でしかなく、植民者でありながら権
力の中心とはなりえない弱者性を帯びていたからであ
ろう」と結ぶ⁶⁾。だが、リースと故郷との関係に注目
してきた筆者には、この「場面」が彼女の子ども時代
の記憶を投影したものとは考え難い。

『広い藻の海』は、シャーロット・ブロンテの『ジェ

イン・エア』（1847）に登場するジャマイカ生まれの
クリオール「狂女ロチェスター夫人」を主人公に据え
た、スピノフの傑作である。娘時代のロチェスター
夫人が目撃したと語る「場面」の背景は、1833年奴
隷制廃止直後の英領ジャマイカであり、20世紀にまた
がるリースの子ども時代のドミニカ島ではない。彼女
にとっての「転倒した構図」と言えるのは、1936年故
郷への一時帰郷で目撃した、非白人による自治権要求
運動の激化と白人地主層の没落という故郷の変容だろ
う。「本国資本で整備された立派な道路を管理できな
い黒人たち」や、「幼い頃に静けさを求めて通った図書
館を混雑させている黒人たち」など、帰郷の思い出を
綴る短編や自叙伝に、変化の具体例が記されている⁷⁾。

朴が示した場面は、40歳代半ばのクリオール女性
リースが帰郷で見たものを、『ジェイン・エア』の時代
や設定と齟齬のないよう脚色し、「少女の記憶」とし
て描いたものだと理解できる。数十年ぶりに目撃した
故郷の変化に困惑し、それを後にリースは「正直」に
綴った。70年代半ばには、その「正直さ」は人種主義
的と批判され、短編集への掲載を見送られた作品もあ
る⁸⁾。

むろん元植民者をただ批判するだけでは、かえって
「本国のしたこと」を隠蔽することにつながりかねな
い。他方で、朴の「弱者性を帯びた植民者」の苦悩を最
大限に読み取ろうとする寛容さは、誤読を誘発させる
だけでなく、植民者もまた帝国の一員だったという、
西川が自身の過去と対峙し訴え続けた事実をも、曖昧
にさせる恐れがある。

本稿で取り上げるリースとオーフリーの作品も、
「植民地である故郷」を描いている点で「引揚げ文学」
と呼べるかもしれない。だが、朴が紹介する日本人作
家のほとんどが、敗戦後、旧支配地域を訪れていない
一方で、リース、オーフリーとも、長い時を隔てて、
奴隷解放以降、最大の政治的・社会的変化に席卷され
た故郷を目撃している。そのインパクトが、故郷の島
を、ただ懐かしむ対象とだけにはせず、それを描く
際に、意識的あるいは無意識的に何らかの自制や葛藤
を、彼女たちに持ち込ませたことが予想できる。

二人の故郷への心情描写を考察することで、植民地
支配の歴史所産であるクリオール(女性)の苦悩とはど
こにあったのかを確認する。その作業は、植民地主義
の過酷さを再確認するための一工程にもなるだろう。

2. 故郷出帆の背景と離島後の苦難

英領植民地生まれのクリオールが、故郷の島を離れ
る時期と理由にはジェンダーによる差異が認められ
る。

クリオール少年たちの多くは、中等教育や高等教育
を受けるため本国イギリスに「帰国」した。リースの

兄も本国で教育を受け、インド植民地の行政官になっている。一方、教育のために島を離れるクリオール少女は少ない。19世紀末から20世紀にかけて、リースやオーフリーが学齢期にあった頃、ドミニカのクリオール少女、とくにイギリス国教会への信仰が厚い家庭の娘の場合、学校という選択肢は皆無に近かった。島唯一の女子中等学校がカトリック教会の運営によるものだったからである。

七年戦争(1756-63)をはさんだフランスによる支配の影響で、1808年にイギリス支配が確定した後も、ドミニカでは人口の9割がカトリック教徒だった。そのため英系白人支配層は、息子たちを本国に行かせ娘たちにはたいい家庭で教育を施した。リースは母方が仏系クリオールであったため、はじめカトリック修道院学校で学んだが、英系の父の意向により、16歳で本国の女子中等学校に編入するため離島した⁹⁾。オーフリーは、島の実力者で熱心な国教会信徒であった祖父の命で、祖父の姉妹にあたる大叔母たちから、英詩や英文学などの手ほどきを受けた¹⁰⁾。

女性が職業を持つことが本国ですら一般的でなかった時代に、植民地の小島で若いクリオール女性は、生家を出るのは結婚時しかなかった。だが、「純粋な白人」同士、同程度の経済水準の家同士の縁組しか想定しない白人支配層では、娘の結婚相手の候補者は、かれら自身の没落ととともに激減していく。ドミニカは、ほかの英領西インド植民地と比べても、もともと白人人口が少なかったうえに、1880年代以降は、主要産業である砂糖の価格暴落が、白人地主層の暮らしを脅かした¹¹⁾。20世紀初頭に、人口6万人に対して白人が100人ほどになった島では¹²⁾、「口減らし」をしたい白人家族にとって、娘たちを島以外の「貰い手」に引き取ってもらうことが必要となった。

リースとオーフリーの姉妹の大半は、この型に則って離島している。オーフリーは、四姉妹のうち唯一、家庭教育を受けた後も実家に留まった。植民地政府役人であった父の仕事を補佐し、本国系銀行のドミニカ支店で事務員も経験した。しかし年若い女性が自活することは難しく、祖父と親交のあった米モルガン銀行一族の厚意で、19歳で単身ニューヨークに渡った。

リースとオーフリーは、こうして、進学や生活の糧を求めてそれぞれ故郷を後にした。しかし、植民地の没落白人層の娘が単身で離島した先に、経済的な後ろ盾は期待できなかった。彼女たちの後半生における故郷観に与えた影響を考えるためにも、故郷を離れ経験した苦難の様子を短く概観しておきたい。

ジーン・リースの場合

リースは1907年8月ドミニカ島を離れ、ケンブリッジの名門女学校に編入する。当時の大学進学基準を満たす成績を上げたが進学せず、女優をめざして俳優養成

成学校に入学するも、半年で退学する。「父の死去で授業料が払えず辞めた」とリースは自叙伝に書いたが、「黒人のような英語を話す」と揶揄され、「英語矯正の成果は見込めない」と突き放された「白い西インド人少女」の居場所がなかったというのが事実だった¹³⁾。

19歳のリースは自活の途を求めてロンドンでコーラスガールとなる。リース評伝の著者キャロル・アンジェは、二流劇団のコーラスガールとなったリースにもはや「正規のルート」は望めなかっただろうと書く¹⁴⁾。当時、コーラスガールは娼婦を意味する「別名」でもあった¹⁵⁾。本人の自覚はともかく、少なくとも周囲はそうに見ていた。地方巡業中の20歳のリースを見初めた40歳の「金融ジェントルマン」も同様だった。二人の関係は一年ほどで終わり、「手切れ金」を与えられたリースは、不特定の男性との「性とカネとのこそそそとした交換」生活を送った果てに¹⁶⁾、「父親不明」の妊娠と中絶手術を経験する。

不幸続きの本国を脱出したのは、オランダ人ジャーナリストとの結婚が契機だった。19年初頭オランダへ向かい、その後フランスに移り第一子をもうけるが、生後3週間で亡くす。翌年には夫が横領罪で起訴され、逃亡生活を余儀なくされる。22年に娘を授かるが、養育は乳児院や友人の手に委ねざるを得なかった。23年夫が逮捕、収監される一方、かつての恋愛と中絶経験などを綴ったノートがある編集者の手に渡り、それを元に作品制作を勧められたリースは、27年初の作品集を出版する。

娘を別れた夫の元に残し、リースはイギリスに戻ってくる。二度と戻るつもりはなかった国に仕方なく舞い戻ったリースは、作家としての再起に賭ける。書籍出版代理人として出会った男性と再婚したリースは、彼の公私にわたる支援を受け、それからおよそ10年間、生涯で最も充実した創作活動を行なう。作品のほとんどを39年頃までに生み出したが、途中36年2月から4か月間、唯一の帰郷を果たす。その際に見聞した故郷の変化、とりわけ脱植民地過程に生じる「人種」間関係の変化と、それに伴う白人支配層の経済力や威信の低下に衝撃を受けたリースは、「16歳までの故郷」が喪失しつつあることを痛感する。

45年夫の急死がリースの喪失感に拍車をかける。作家人生の集大成とした『広い藻の海』への創作は、この後、亡夫のいここにあたる男性との、経済的に不安定な再々婚生活のなかで、心身の変調もきたし思うように進まなかった。貧困と、老夫の介護と、自身の健康悪化のなか、最後の長編に賭ける情熱は、若い編集者らの協力を得てようやく完結する。1966年『広い藻の海』は刊行後大きな話題となり、人生の晩年に作家としての地位を得たリースは、故郷独立の78年に「大英帝国勲章」を受け、翌年、89年の生涯を閉じた。

フィリス・オーフリーの場合

27年に19歳で単身渡米したオーフリーは、「富める国」で西インドの貧しさを認識する。その後、先に本国に渡っていた姉の夫の弟にあたる男性と恋に落ち、30年に結婚する。だが恐慌下アメリカでの新婚生活は厳しく、娘の誕生後も夫の雇用状態が不安定だったため、オーフリーは生後間もない娘を連れ、31年末から32年夏まで、求職のため帰郷する。

リースの帰郷時期と同様、故郷の自治権を求める政治運動や黒人の労働運動は、高まりのピークを迎えていた。23歳の若きオーフリーが見聞した故郷の変化は、その時点ではなく、むしろその後長らく暮らす本国での政治体験を積み重ね、折に触れ想起され、再認識されていく¹⁷⁾。

夫に職が見つかったことから北米に戻ったものの、第二子が誕生して間もなく、夫が再び失職する。これを契機に、36年オーフリーは家族とともに、夫の実家を頼ってイギリスに渡る。無職で帰国した息子家族に、夫の周囲は冷淡だった。オーフリーは、生活の糧を得るため仕事を転々とする。

彼女の政治的関心は、38年貴族で社会主義者でもあったナオミ・ミッチソンの秘書に採用されたことで一気に高まる。ミッチソンを通してインドのネルーら植民地の指導者たちと知り合い、急速に反ファシズム、反帝国主義への姿勢を強める。43年にはフェビアン協会が主催する西インド委員会に参加し、「植民地を自治国に」を目標に、情報収集、国会議員へのアピールに働く一方、本国での拠点を訪れる西インドの政治指導者たちとの交流を深める。45年の英労働党アトリー政権成立後は、議員秘書として、労働組合を土台とした政党活動の現場を体験する。この経験が、のちに故郷での初の政党「ドミニカ労働党」設立に役立つ。

経済的苦境にあったものの、イギリスでは政治活動と並行して文筆活動にも力を注いだ。とくに幼い頃から親しんだ詩作には精力的に取り組み、ロンドンの文芸サークルでしだいに名と作品が知られるようになったオーフリーは、50年に欧州女性詩人コンクールで二席に入る。また、政治活動を通して、西インド植民地の政治状況に関して認識を深めるうち、故郷に直接役立てる方法を模索するようになる。オーフリーはその青写真ともいえる内容を物語に仕立て、53年唯一の長編小説『オーキッド・ハウス』を出版する¹⁸⁾。

同年、政党準備のため帰郷したオーフリーは「カロード」指導者らとともに、苦心の末55年ドミニカ労働党を設立し党首に就任する。58年には、海域植民地をまとめて独立させようとする、宗主国の思惑との妥協の産物として成立した「西インド連邦」で、唯一の白人、唯一の女性閣僚となる。だが主権移譲を渋るイギリスへの反発が強まり、連邦は4年で瓦解し失意のう

ち帰郷する。政治活動を再開するはずの故郷にも白人を敵視する「ブラック・ナショナリズム」が到来しており、オーフリー排除の動きが活発になるなか、62年秋に労働党を除名処分となる。故郷での政治生命が絶たれた後は夫とともに地元新聞を発行し、政治的メッセージを発信し続け、86年貧困の中で死去する。

3. 最後期作品のなかの「故郷と自分」

最初期の評価

西インド文学評論のバイブルとも言える *The West Indian Novel and its Background* (1970) の著者ケニス・ラムチャンド (Kenneth Ramchand, 1939-) は¹⁹⁾、その大著刊行の前年に一本の論文を発表している。‘Terrified Consciousness’ と題された論文は²⁰⁾、53年刊行のオーフリー『オーキッド・ハウス』と66年のリース『広い藻の海』を比較し評論した、おそらく最も初期のものだろう。彼はもう1作品、バルバドス出身のジェフリー・ドレイトン (Geoffrey Drayton) *Christopher* (1959) も加えて²¹⁾、白人地主層の没落として認識される社会経済的状态に注目し、分析する。インド系トリニダード人のラムチャンドが、同じ (旧) 英領西インド植民地出身の白人作家による「故郷物語」を評したものとも言える。

論文表題の‘Terrified Consciousness’は、フランツ・ファノン *The Wretched of the Earth* (1961) の一節から借用された。脱植民地過程で被支配者からの要求によって起こる変化は、植民地開拓者たちの意識にも「恐ろしい未来’ (‘a terrifying future’) という形で体験されるというファノンの主張を、ラムチャンドは自身の論考で援用する。

ラムチャンドは、‘Terrified Consciousness’ 「恐怖の意識」というフレーズを、白人マイノリティが、かれらの権力意識のなかに、不満にくすぶる大勢の黒人たちが入ってくるときの衝撃と混乱の様を表すのに用いるとする。その意味で、取り上げた3作品は、白人の「恐怖の意識」は描かれているが、ファノンの言う被支配者たちによる要求、つまりブラック・ナショナリズムの文脈との関連性が弱いと評する²²⁾。

オーフリーの『オーキッド・ハウス』には、滅びゆく過去への郷愁と島の政治的将来への希望とが両立して描かれているが、リースの『広い藻の海』には、奴隷解放時のクリオール女性の「自己認識の危機」が描かれるのみで、「歴史的」ではあるが、現代にも通じるような経験を、歴史的材料を使って創作しているにすぎないと手厳しい²³⁾。

ラムチャンドによる評価を念頭に置きつつ、オーフリー、リースの最後期の作品から、ブラック・ナショナリズムとの関連性の有無も含め、二人の故郷への描写とその意味を考察していこう。

オーフリー 'It Falls into Place' (1964)

本作はPhillip Warnerの筆名で、夫とともに編集を引き継いだ地元紙『ドミニカ・ヘラルド』の64年6月13日紙面に掲載された。設立に奔走し党首を務めたドミニカ労働党を除名され、故郷での政治活動の事実上の終焉から、2年後に発表された作品である²⁴⁾。

語り手のフィリップは、叔母キャロラインに見送られ、二人にとっての生まれ故郷である島へと発つ。島訪問の目的は、同郷の詩人の評伝を書くための取材だった。詩人は、父の「本国」フランスで学業を終え島に戻って生涯を終えたが、その人生は作品同様、ほとんど知られていなかった。

島では、忘れ去られ無視されていると訴えていた詩人の晩年の様子を聞く。詩人のかつての住居に植物が生い茂る様を見て、彼の痕跡さえ消そうとしているようだと言いつつフィリップは思う。詩人は、何か欠落したものを、いつも求め苦しんでいたようだったと聞いたフィリップは、その「欠落したものを」探そうとする。

取材中、フィリップは幼ない頃親しんだ島の邸宅街を訪れる。かつて叔母キャロラインが住んだ屋敷を訪ねた際、管理人である英系の老貴婦人が、亡くなる直前まで詩人が頻繁にこの屋敷を訪れていたと話す。これを聞きフィリップは、突然、詩人が求めていた「欠落物」とは恋ではなかったかと思いつく。直後、フィリップは屋敷の庭をよく知っている自分に気づく。ハンモックに寝そべる若き叔母と彼女を見つめる詩人。「ああ、これで腑に落ちました」とフィリップは言う。居住者なきこの屋敷をしばしば訪れては、管理人である自分を困惑させていた詩人を思い出し、老貴婦人も同じフレーズ 'It falls into place.' を繰り返す。

屋敷を出たフィリップは、クリケットの試合に集まった一群と出会う。そのなかには旧友が彼に気づき、こんな大きな試合中に出歩いている彼を責め始めた。いいじゃないか、とフィリップは言う。「クリケットのスコアが忘れ去られたずっと後でも、詩人の美しくメランコリックな詩は読まれるだろう。世界のどこかで。そして、彼の苦悩の謎は、友人たちの間で最後には語られるだろう。」さらに「試合中のかれらに聞こえる程度に」フィリップはつぶやく。「彼がフランス人でもイギリス人でも、カラードでも白人でもいいじゃないか。彼は偉大な詩人だった。彼の愛は成就しなかったが、いつまでも我々とともにあるのだから」と。

オーフリー評伝の著者で短編集の編者でもあるリザベス・パラビシーニによれば、詩人のモデルはダニエル・サリー (Daniel Thaly, 1879-1950) という実在の人物で²⁵⁾、オーフリー最晩年のインタビューでも、「ドクター・サリーと呼ばれていたマルティニク出身の高齢男性」で、幼いオーフリーに「たくさんの本を貸してくれた詩人だった」が、「忘れられた人物だった」と

回想されている²⁶⁾。

ドミニカの著名人を紹介するサイトには²⁷⁾、サリーは仏領西インド・マルティニク島出身の父とドミニカ島出身の母のもとドミニカで生まれ、マルティニクの中等学校に進学後、仏トゥールーズで医学を修めたとある。ドミニカに帰郷後は、首都ロゾーの博物館で学芸員を務める傍ら、10冊の詩集を出版した。オーフリーは幼少期から、「家庭教師」でもあった大叔母マーガレットの友人であるサリーと親しく接していた。彼の描くドミニカの美しい情景詩を賞賛しており、自身の代表作『オーキッド・ハウス』の冒頭で、その一節を使用しているほどである。

一読では「詩人の過去の恋の発見物語」のような印象を与える本作に関して、筆者の管見のかぎり、批評らしきものは見当たらない。よって、オーフリーの個人史とりわけドミニカ労働党除名という、おそらく本人も予想外の事態から間もない作品であるという事実と、ドミニカの政治的状况から分析する他はない。

まず考えられるのは、フィリップがオーフリーの投影であることだ。彼は、相当な年月を隔てて、生まれ育った島に帰郷する。そこに家族や親族がいるふうでもない。唐突に登場する、「クリケット大会」の場に集まっていた旧友数人が彼の知り合いである。この設定は、オーフリーが53年に労働党設立のため17年ぶりに帰郷したことを想起させる。本国で政治修行はしたものの、故郷の改革に役立てるのか、不安と自負とがない交ぜになったような気持ちであったと思われる、そのオーフリー自身である。

他方で、フィリップの取材対象である詩人にも、オーフリーとの重複が見られる。作中から発せられるのは、詩人の「忘れられることへの抗いと哀しみ」である。彼の作品と生涯はほとんど知られることなく忘れ去られた。クリストファーが詩人の旧住居に生い茂る植物を見て、彼の生存の証すら消し去ろうとする自然の力に呆然とするが、ここには、当時のオーフリーの「予感」も読み取れる。

オーフリーは、すでに見たように、文芸と政治の二足のわらじを履いて生きてきた。二者の間の比重は、その時々で状況で変化した。少なくとも53年から62年西インド連邦崩壊までのおよそ10年間は、政治活動に専念した。その後は自身が立ち上げた地元紙に短編を数本掲載するが、本作の創作時点の彼女には、『オーキッド・ハウス』のほかイギリス時代に雑誌発表した短編数本が、「業績」としてあるだけだった。

西インド連邦崩壊と党除名によって、「わらじ」のうち一足をもぎ取られてしまった。文芸活動にシフトすれば、この困難な事態を乗り越えられたかもしれない。だが、「政治がすっかり私から文芸の熱情を奪った」と語るように²⁸⁾、創作時間はできたが、その情熱もまた失われていった。オーフリーの「予感」は皮肉に

も当たったことになる。文芸と政治の両世界でのオーフリーの島の人々に残した「痕跡」は、現在、ドミニカ唯一の総合書店で、作品に触れることでうかがい知れるにとどまる。

短い物語に伴走してきた読者は、フィリップの最後の「つぶやき」に、フィリップ＝オーフリーの政治的執念を垣間見ることになる。「人種など関係ない」というつぶやきは、詩人の「欠落」の正体が判明した物語の結びとして明らかに唐突だ。それゆえ作者の、物語の流れを損なってでも書いておきたいメッセージを読み取る必要がある。

「人種」、ジェンダーの多様性ある「これからの西インド世界」は、オーフリーの西インド連邦閣僚時代からの一貫した政治理念だった²⁹⁾。最後の「つぶやき」は、かなり抑制的ではあるが、「ブラック・ナショナリズム」に傾倒した古巣の労働党指導部に向けられている。本作掲載から1年前、つまり党除名から1年後、同紙『ドミニカ・ヘラルド』に連邦時代をふり返って寄せたエッセイのなかで、「ブラック・ナショナリズム」を偏狭な思想だと批判していることから³⁰⁾、本作をその「物語バージョン」として、再度、同主張を盛り込んだと考えられる。

「ブラック・ナショナリズム」を批判し続けたオーフリーだが、仏領西インドに広まった黒人固有の文化と文学を称揚する「ネグリチュード運動」には、白人敵視の要素がないという理由で共感的だったという³¹⁾。党除名後にペンネームまで使い、批判を避け、抑制的筆致でまとめた本作に、詩人の生涯を中心に据えた点で、筆者はオーフリーの、政治を描き残そうとする強い意志を見る。ドミニカ著名人サイトに現在掲載中の、詩人ダニエル・サリーに関する「特記事項」、「ネグリチュード運動の先駆者の一人として仏系西インド人の研究対象になっている」という一文を目にした読者は、物語の最後に詩人が再度言及される、その理由と目的とを理解する。

「彼の愛は成就しなかったが、いつまでも我々とともにある」。作品最後の一文が示すように、オーフリーと故郷との政治的連帯は、高い理念をもってしても成就しなかった。それを認めたくえで、相思相愛にはなれなかった故郷と故郷の人々とともに、いつまでも生きていく。オーフリーの覚悟の表明である。

リース 'I Used to Live Here Once' (1975)

最後の作品集*Sleep It Off Lady* (1976)の最後に所収された本作品は、わずか1頁半という短さである³²⁾。1966年の『広い藻の海』で作家としての名声を得るが、本人も語ったように「すべて遅すぎた」。とくに夫を亡くして以降は、加齢と長年にわたるアルコール中毒や慢性的うつ症状に悩まされ、入退院を繰り返す。74年晩秋には、老人介護施設に一時入所するほど衰弱

する。自力での執筆が困難になっていくなか、本作は作品集のための「予備」として、75年7月に執筆された³³⁾。直後にもう一作品の手直しをするが、聞き書きで構成された未完の『自叙伝』を除き、これが生涯最後の作品の一つと見てよいだろう。

「かつて私はここに住んでいた」というタイトルの物語は、三人称sheが主人公の、淡々とした情景描写で始まる。「彼女」は川のそばに立ち、横たわる飛び石を見つめている。丸くて不安定な石、真ん中の平らな石。飛び石の配置や特徴を思い出しながら、実際に川を歩く。今度は道を歩いている。しかし倒木してふさがれていた箇所は、まだ復旧していない。それでもかつてと同じ道を歩きながら、幸福感に包まれる。

快晴だが、こんなに空がよそよそしいくらい青く思えたことは、これまでの記憶にない。彼女は青い空を「無表情」(glassy)という言葉でしか形容できない。そう思いながら歩いていくと、かつて彼女が住んでいた家が近づいてくる。心臓が高鳴る。遠目には、「美容蝟の木」がなくなっているが、丁子の木はまだある。彼女は「なくなったもの」と「まだあるもの」を確認しながら家に近づいていく。

ついに家の前に来る。車が一台家の前に止まっているのが奇妙に見えた。男の子と彼より年少の女の子がマンゴーの木の下にいたので、「こんにちは」と言って手を振った。だが、子どもたちは応答をせず、こちらを向こうともしない。彼女はかれらを観察して次のような感想を持つ。「とても色白の子どもたちだ。西インドで生まれたヨーロッパ系はたいていそうだけど。まるで、白人の血統が、残りものに対して一人自己主張しているみたいだ。」

彼女は再度、子どもたちに声をかけ、「私は昔ここに住んでいた」と口にした。それでもかれらは応答しない。3度目に、今度はさらに近づいて声をかけた。自分の腕をかれらに触れられるくらい伸ばして。すると男の子がふり返り、表情も変えずに彼女の方を見る。彼は彼女に向かってではなく、妹と思いきわ女児に向かって、「寒くなってきたから中に入ろう」と言う。

芝生を横切り家に入って行く子どもたちを見て、彼女は差し出していた腕を下ろす。「その時、彼女は初めてわかったのだ」。作品はこの一文で閉じられる。

オーフリーと異なり、リース作品には多くの評論が蓄積されてきた。なかでも、リースの30を超す短編小説について、複数の研究者が論じた『ジーン・リース短編研究』は、文字通り、各作品を、文体や登場人物や筋立てなど、多様な観点から分析した「短編研究」の決定版とも言える。しかし、この書にも、本作への言及はほんのわずかしかない。

「語り手が、長らく離れていた場所に戻った先で、自分が、時代や道徳観によってその場から切り離されていることに気づく」³⁴⁾、「死んでしまえばすっかり忘れ

られ、かつてあった場所について(現在居る人々と)やりとりができないという悲痛な着想を、幽霊のイメージを用いて表明している³⁵⁾、とのそれぞれ短い指摘が主な作品評である。

二つの指摘はどちらも的を射たものだ。とりわけ前者の指摘は重要だが、作中、彼女がどのような「時代や道徳観によってその場から切り離され」たのかという点には、踏み込んでいない。筆者は、まさにこの点が本作のテーマだと理解している。

本誌63輯において筆者は、1936年2月から4か月間の帰郷を経た後、リースの描く故郷に変化が起きたことを、いくつかの短編小説を例にとり解説した。離島してからおよそ30年を経て、脱植民地へと不可逆な歩みを進めていく故郷の変化を目撃してしまった衝撃の強さは、最後の帰郷までに何度か往來を繰り返したオプリーのそれより、大きかったと推測される。白人地主層の没落、「カロード」勢力の台頭、黒人労働者たちの組織化と政治化は、すでに第一次世界大戦前から進行していたが、リース帰郷の時期には、それらが島のあらゆる場面で可視化していたからだ。

『自叙伝』には、帰郷時の挿話として、幼い頃の居場所であった図書館が、いまや「貸し出し台で本を差し出す手がすべて黒人のものである」という驚きを綴っている³⁶⁾。黒人への教育機会も徐々に増え、当時島で唯一の図書館も、かれらに開放されていたということだろう。他方で、帰郷時に島内をラバで周遊する際の、介助とガイドの仕事は黒人によって担われた。黒人労働者の存在感が増してきたとはいえ、現実として、かれらの職種はまだ限られていた。それでもリースは、「この島はもはや黒人のもの」と漏らす³⁷⁾。

帰郷から40年あまりが過ぎ、亡くなる前年に行われたインタビューで、「変わってしまった故郷よりも、幼い頃の故郷を描きたい」とリースは語った³⁸⁾。しかし実際には、インタビューの3年前に脱稿した本作が最後の故郷物語になった。そのことを前提に、彼女が「どのような時代や道徳観によって故郷から切り離されたのか」という問いに改めて回答するなら、それは、自治権要求に始まる脱植民地化へと進む「時代」、そして、支配された側が闘争過程でようやく承認させつつあった、「人種」の平等という「道徳観」である。

この「時代と道徳観」は、あくまで支配された側から要求され、積み上げられたものだ。すでに言及したように、帰郷時の衝撃を「正直」に描いた短編(「インペリアル・ロード」)は、編集サイドから却下され、最後の作品集に載ることはなかった。リースが「ある」と信じ、辿った整備道路が半ばで途絶えていたことを、「管理できない黒人たちのせいだ」と描いたことが「人種差別的」と問題視された³⁹⁾。その後の調査で、「道」じたいが、リースの離島時にはまだ完成していなかったことが判明する。故郷に対する「子ども時代の記憶」

のあいまいさを示すと同時に、この一件は、「宗主国イギリス」における「時代と道徳観」への「付度」が作動した例だと考えるべきだろう。

本作を含むリース最後の作品集の編集作業が行われた70年代半ばには、本国でも「知識層」を中心に反人種差別の思想は広まっていった。ただし、それは白人の発明品ではない。ここでも、支配された側からの要求によって獲得されていったものだった。

リースの「肌の色の異なる同胞」たちが本国にやってくるのは、1940年代末以降のことだ。第二次世界大戦後の労働力不足を補うため、宗主国みずから、カリブ海植民地から労働移民を奨励したことが背景にある。しかし、本国における人種差別は、日常生活から職場にいたる様々な場面で、移民たちを追い詰め、挑発し続けた。その果てに、「人種摩擦」は大規模な「人種暴動」へと発展した。なかでも58年8月から9月に発生した「ノッティンガム・ノッティンヒル暴動」は多数の死者・負傷者を出す惨事となった。リースはこの事件を短編作品に落とし込み、本国と本国人の差別に対する無知と無関心をあぶりだした⁴⁰⁾。

代表作『広い藻の海』にしても、本国の負の歴史を告発した内容であることは明らかだ。リースは本国人に対して、西インド植民地の歴史を忘却することを許さない作家なのだ。にもかかわらず、自分たちが主導してこしらえたかのような、「本国における人種差別コード」が適用される。「インペリアル・ロード」不採用時のリースの怒りがしのばれる。結局、「予備」として用意された本作が、最終的に作品集の最後の頁を飾ることになったのである。

この物語にも、リースの「人種観」が顔をのぞかせている。「まるで、白人の血統が、残りものに対して一人自己主張しているみたいだ」という、主人公が二人の子どもに抱いた印象部分は、筆者が編集者なら、掲載を躊躇し「修正」を要求するかもしれない。ただ、「残りもの」(‘all odds’)が、必ずしも「島の非白人」を指すとは断定できないうえ、何より、この部分には、リースの、やがて消えゆくクリオールへの自嘲気味な哀感が読み取れる。没になった作品の主題である「かつての道」も再度描き込みつつ、視点を非白人からクリオールへと移すことで、「人種差別コード」を通過したのかもしれない。

本作への短い論評にあったように、「死んでしまえばすっかり忘れられ、かつてあった場所について(現在居る人々と)やりとりができないという悲痛な着想」には、胸を衝かれる。オプリーが参画した「西インド連邦」の一員を経て、近い将来、独立を果たそうとする故郷に、クリオールは必要とされていない。リースは、戻れない故郷を、わずかな郷愁をも断ち切るかのように、「幽霊」となって描いてみせた。究極の「故郷喪失感」の表現である。

4. 故郷物語とクリオール覚悟—まとめにかえて

二作品には、「故郷から忘却されること」と「故郷を喪失すること」が描かれていた。オーフリーは、自己の存在を忘れないでと同胞に訴えかけているのに対し、リースは本国イギリス（の読者）に向けて「故郷喪失」の非情さを喚起させようとしている。死ぬまで島を離れずにいたオーフリーと、90年近い生涯で一度しか帰郷しなかったリースとの、故郷との時間的つながりの長さが、この差異の背景にあるかもしれない。

ほぼ同時代の同郷人でありながら、二人の対面の機会は少ない。オーフリーが北米からイギリスへと移住した36年に二人は初めて言葉を交わす。リースが帰郷から戻った頃である。38年二度目の対面の際、「ドミニカの白人はいまやごく普通の人々になった」と語るオーフリーに、リースが機嫌を損ねたという挿話が残っている⁴¹⁾。

このエピソードは、変わり行く故郷の受け止め方に、帰郷時点での年齢の違いに加えて、本国での経験も影響があったことを想像させる。リースは本国の、白人中産階級が占める女学校や演劇学校で、「おかしな英語を話す白い西インド人」として扱われ、「正規のルート」をはずされて、本国白人社会の底辺を生きざるを得なかった。やむを得ず戻ってきた後も自分に冷淡な国で、「西インド人」としてのプライドを盾に創作にまい進した。ところが創作活動の絶頂期に、「白い西インド人」は嫌悪されるだけの存在になったことを帰郷によって思い知らされる。他方オーフリーは、まだ何者でもなかった23歳で初めて帰郷し、数年後、ファシズムや帝国主義という「共通の敵」に向かえた時代の本国に移り住む。本国白人社会は「白い西インド人」の存在に注意を向けているどころではなかったのだ。

大戦後、再燃する植民地解放の気運の中にみずから参画したオーフリーが、西インド連邦の崩壊と、故郷での政治的活動の手段を失った頃、リースは代表作を発表する。二人の交流が再開したのはこの時期である。自身が主宰する地元紙に、オーフリーは、リースの作家活動を誇らしく記事にした。島の人々にクリオール女性の活躍を紹介することで、自身の存在を確認させたかったのかもしれない。『オーキッド・ハウス』で、いち早く西インド植民地社会の変容を描いたにも関わらず、10年以上遅れて出たリースの『広い藻の海』に世界的な注目が集まったことに、心穏やかではなかったが⁴²⁾、同郷のクリオール女性であり、創作の苦労を分かり合える者同士でもあるリースに、オーフリーは手紙による交流を、リースの死去まで続けた。

亡くなる5年前、リースはオーフリーから帰郷を促す便りを受けとる。リースは、「人は生まれた場所で死ぬべきだと思う」と書きつつ、他方では「もうずい

ぶん前からそうだった」と、「島のゴキブリや虫の類が苦手になった」ことを理由に、故郷に帰る意思のないことを返信した⁴³⁾。帰郷から戻ったリースは、故郷に居場所のないことを痛感したのではないだろうか。最後の作品の内容が、この推測を「真実」へと近づけてくれる。島への帰還を勧めたオーフリーが、リースにとっての故郷を、さらに遠ざけるような政治活動に情熱を注いだことも、ふり返れば、皮肉なことだ。

二人のクリオールは、故郷の「現在」が白人支配の時代に戻ることはない確信を持って描いている。それぞれの作品は、その実現のために働いたが挫折したクリオール女性と、その事実を受け入れるために故郷と決別したクリオール女性によって描かれた。「被支配者たちによる要求、つまりブラック・ナショナリズムの文脈との関連性が弱い」というラムチャンドの評価は、両者に当てはまる。「自分」を中心に脱植民地過程の故郷を描いているからだ。

では、そのことをもってこの二作品が、西川の言う「読むに堪えない犠牲者ナショナリズムとヒロイズム」に覆われているかといえば、決してそうではない。生まれ育った場所への郷愁を、ありのままには表現しえない人々の「故郷物語」には、植民地支配の歴史が確かに刻み込まれていた。彼女たちの沈痛な覚悟や寂寥感に、思わず共振してしまいたい衝動を抑え、その先の、今日もいまだ解決を見ない問題に思いを致すことができるか。クリオール女性の「故郷物語」は、私たち読者の挑戦を歓迎してくれる。

【本研究はJSPS科研費（課題番号17K02077）の助成を受けた】

註

- 堀内真由美「英領西インド・白人クリオールの「植民地責任」—ジーン・リースと作品から—」、『愛知教育大学研究報告』第63輯（人文・社会科学編）、2014年、73-81頁、同「クリオール女性の脱植民地理念をめぐる困難—フィリス・S・オーフリーと英領西インド植民地」、同『報告』第65輯、2016年、61-69頁。
- 『言語文化研究』24巻4号、2013年、立命館大学国際言語文化研究所、113頁。
- 西川長夫『植民地主義の時代を生きて』、平凡社、2013年、212頁。
- 西川、前掲書、220頁。
- 朴裕河『引揚げ文学論序説—新たなポストコロニアルへ』、人文書院、2016年、14頁。
- 朴、前掲書、57頁。
- 堀内（2014）前掲論文。
- 未掲載の短編「Imperial Road」については後述。
- リースの生涯については次の評伝を参照。Angier, C., *Jean Rhys: Life and Work*, Little, Brown and Company, 1990.
- オーフリーの生涯については次の評伝を参照。Paravisini, G. L., *Phyllis Shand Allfrey: A Caribbean Life*, Rutgers Univ. Press,

- 1996.
- 11) ドミニカの歴史については次を参照。Honychurch, L., *The Dominica Story: A History of the Island*, Macmillan, 1995 (first edition 1975).
 - 12) Paravisini, G. L., 'Jean Rhys and Phyllis Allfrey: the story of a friendship', *Jean Rhys Review* 9, 1998, pp. 3-4.
 - 13) 堀内真由美「植民地主義の再発見」—ジーン・リースの描くノッティンヒル「人種暴動」、『パブリック・ヒストリー』第12号、2015年(a)、大阪大学西洋史学研究室、同「サフラジェット」の記憶を読む—ジーン・リース初期と後期の2作品から—、『パブリック・ヒストリー』第14号、2017年、大阪大学西洋史学研究室。
 - 14) Angier, *op. cit.*, pp. 54-55.
 - 15) Scharlieb, M. (ed.), *Sexual Problems of To-Day*, Williams and Norgate, 1924.
 - 16) Angier, *op. cit.*, p. 73.
 - 17) 堀内真由美「クリオール女性の帰郷—英領西インド諸島ドミニカとフィリス・オーフリー」、『女性学年報』第38号、日本女性学研究会、2017年11月刊行予定。
 - 18) Allfrey, P. S., *The Orchid House* (first published by Constable in 1953), 1982, Virago Press.
 - 19) Ramchand, K., *The West Indian Novel and its Background* (first published by Faber and Faber in 1970), 2004, Ian Randle Publishers.
 - 20) Ramchand, K., 'Terrified Consciousness', pp. 8-19, *The Journal of Commonwealth Literature*, July, 1969, No. 7, Heinemann Educational Books and the Univ. of Leeds.
 - 21) Drayton, G., *Christopher*, William Collins, 1959.
 - 22) Ramchand, *op. cit.*, pp. 8-9.
 - 23) *Ibid.*, pp. 14-15.
 - 24) 次の作品集に収録。Paravisini, G. L.(ed.), *It Falls Into Place: the stories of Phyllis Shand Allfrey*, 2004, Papillote Press, pp. 120-126.
 - 25) Paravisini (1996), pp. 26-27.
 - 26) Chamberlain, M.(ed.), 'Phyllis Shand Allfrey talking with Polly Pattullo', *Writing Lives: Conversations between Women Writers*, Virago, 1998, p. 226.
 - 27) http://www.domnitjen.com/profiles/profile_thalyd.html (2017年2月9日閲覧)
 - 28) Paravisini (1996), *op. cit.*, p. 224.
 - 29) 堀内 (2016) 前掲論文、同「クリオール女性の脱植民地経験—「西インド連邦」閣僚フィリス・オーフリー」、『女性とジェンダーの歴史』第3号、イギリス女性史研究会、2015年(b)。
 - 30) 'In the Cabinet', Chap. IV, *Dominica Herald*, 12/Oct/1963.
 - 31) Paravisini(1996), *op. cit.*, pp. 239-240.
 - 32) Rhys, J., *Sleep It Off Lady* (first published by André Deutsch 1976), Penguin Books, 1979, pp. 175-176.
 - 33) Angier, *op. cit.*, p. 624.
 - 34) Malcom, C & D, *Jean Rhys: A Study of the Short Fiction*, Twayne Publishers, 1996, p. 7.
 - 35) Malcom, *op. cit.*, p. 175.
 - 36) Rhys, J., *Smile Please: An Unfinished Autobiography*, Penguin Books, 1981, pp. 63-64.
 - 37) Angier, *op. cit.*, p. 59.
 - 38) Vreeland, E., 'Jean Rhys: The Art of Fiction LXIV', *Paris Review*, Fall, 1979, p. 228.
 - 39) Athill, D., *Stet: An Editor's Life*, Grove Press, 2000, pp. 176-179.
 - 40) 堀内 (2015a) 前掲論文。
 - 41) Paravisini (1998), *op. cit.*, pp. 4-6.
 - 42) *Ibid.*, p. 19.
 - 43) *Ibid.*, p. 12.

(2017年9月21日受理)